研究

佐伯市戦後五十年史(三)
―昭和三十年代の社会・文化・スポーツ(続)―

矢野彌生
(会員　佐伯市中山区)

〈前号〉
一二　昭和三十年代の社会・文化・スポーツ
(一)労働問題　(二)白潟遺跡の発見　(三)主要文化団体の活動

一三　昭和三十年代の社会・文化・スポーツ(続)
(四)　スポーツ

昭和三十年代　佐伯はスポーツの盛んな土地である。そのスポーツ　の理由は何であるか明確にはできないが、明るくて血の気が多く、どちらかといえば、思考するより活動を好む佐伯人の気質がスポーツに適合していたということ、また、早くからこの道にすぐれた先覚者や指導者が数多く出て、佐伯のスポーツを開拓し推進してくれたことなどをあげることができる(『佐伯市史』)。

以下、昭和三十年代の佐伯市のスポーツについて、各種目ごとにその概要を紹介してみよう。

〈陸上競技〉　昭和三十年代の佐伯市における陸上競技の活動状況をみると、第34表のとおりである。すなわち、中学生・高校生の活動が目立ち、一般青年レベルの活動が少ないようである。

また、そのほか佐伯市内の中学校・高校では昭和三十年代には県南や県体レベルでの活躍も著しい。

〈水　泳〉　佐伯市におけるスポーツの歴史を回顧するとき、誰しもがまず最初に思い出すのは、輝かしい業績をもつ水泳部のことであろう。そして、その記録をつぶさにたどっていけば、鶴城高校の余りにも絢爛たる戦歴にいまさらのように感嘆せずにはおれないであろう(『佐伯市史』)。

まず、鶴城高校の昭和三十年代の水泳部の活動状況を

第34表　陸上競技の成績

年度	主要な成績
三二	・全国高校陸上で鶴城高一年宮脇泰代が百㍍で第五位となる。
三三	・第十一回静岡国体で大鶴賢佑が走幅跳に七㍍〇一で優勝（大分県新記録）
三四	・全日本中学校放送陸上で彦陽中学の吉田初弘が走高跳に一㍍七一で第二位。
三五	・全国陸上女子四百リレーで佐伯城南中学校全国五位入賞。
三七	・全日本中学放送陸上で鶴谷中学の山城節子が百㍍で第二位。
三九	・全日本中学放送陸上で佐伯城南中学女子百㍍で全国四位、同中学校女子四百リレーで全国四位。 ・全日本中学放送陸上で佐伯城南中学の平井峰子が走幅跳で第四位。 ・県体で鶴城高校山城節子が百㍍に十二秒四で優勝（県新記録、全国高校第五位）。 ・新潟国体で鶴城高校の山城節子、百㍍で第四位。

（『佐伯市史』・『佐伯鶴城部活動史』・『佐伯城南中学校開校三十周年記念誌』などによる）

第35表　佐伯鶴城高校の水泳部の活動

年度	主要な成績
三一	・オリンピック＝メルボルン大会で、野々下耕嗣選手（中央大）八百リレーに出場第四位に入賞。
三二	・全国大会優勝
三三	・全国大会優勝 ・全国大会優勝
三五	・松本健次郎、団体で二百平泳に優勝（日本新）。
三六	・第十六回国体で松本健次郎、二百平泳に世界記録を樹立する。
三七	・全国大会優勝。 ・アジア大会（ジャカルタ）に高橋栄子出場、百バタで優勝（日本新）。
三八	・オーストラリア遠征に岩崎・山南・木田・菅・高橋の五名が参加、高橋は二百バタで世界新記録を樹立。岩崎・山南・木田はともに日本高校新を記録する。
三九	・プレオリンピック（東京）で高橋栄子、百、二百バタに優勝する。 ・東京オリンピック大会に松本健次郎（早大）・岩崎邦宏（早大）が出場。

（『佐伯鶴城高校部活動史』・『佐伯鶴城高校開校70周年記念誌』・『佐伯市史』などによる）

みると、第35表のとおりである。その成績は、全国的、世界的なレベルでの活躍であることが分かる。まさに、佐伯鶴城高校水泳部の黄金時代が到来したことを、その成績は物語るものである。

昭和三十年代の佐伯鶴城高水泳部の活躍の一端を、『市報さいき』（昭和三十八年三月十五日号）は次のように伝えている。

岡田部長と活躍した五選手

豪州派遣日本水上競技メンバーとして選ばれ、勇名をとどろかせた、鶴城高校五選手（岩崎邦広君、山南広一君、菅孝則君、木田和夫君、高橋栄子さん）は、世界新記録一、高校選手権三、日本新記録一、高校新記録など、数多くの輝かしい記録を土産に去る二日午後郷土に帰省しました。

この日駅頭には、市長をはじめ市内各界の代表者多数、鶴城高校職員、生徒、同窓会、ＰＴＡ関係者、一般市民約千五百名が、旗のぼりもにぎやかにつめかけ、空からは関西航空のセスナ機が「鶴城高校おめでとう」「世界記録おめでとう」の祝辞の雨を降らせ、かつてない盛大な歓迎に、岡田部長に引率されて歓迎台に立った若い英雄たちもさすがに緊

上はパレード、
下は佐伯駅の歓迎風景

張した面もちでした。

和服姿の六人のお嬢さんたちから岡田部長をはじめ五選手に、一斉に花束が贈られ、続いて市長から「皆さんの活躍で一躍世界の鶴城となり…」と感激とねぎらいの挨拶があり、選手代表山南君の謝辞の後校歌斉唱、万才三唱と続き歓迎式を終りました。

その後、選手は、各方面から提供されたジープやオープンカーに分乗して、市内目抜通りをパレード、沿道を埋めた多数の市民の歓迎に応え、午後四時、同体育館で開催された歓迎祝賀会並びに同校水泳部後援会発会式に臨みました。

〈佐伯鶴城高水泳部の歴史に残る二人の名監督〉　二人とは横川末吉と岡田正一である。

横川末吉

横川は昭和四年(一九二九)七月に水泳部の監督に就任。彼は練習の時には青竹を持ってプールサイドに立ち、城下にとどろくような大声で叱咤激励するなど、そのスパルタ式指導は有名であった。

横川は、十数年間監督を務め、吉田喜一選手(早稲田大・ベルリンオリンピック百米平泳ぎ五位)をはじめ、多くの名選手を育てた。まさに佐伯中学校水泳部の生みの親であり、その業績は偉大である。また教育者としてもすぐれ、郷土史や地理学研究においても実績を残している。[73]

岡田正一

一方、岡田正一は佐伯中学の社会科教師になってからは、横川末吉の後を継いで水泳部部長兼監督となって、選手たちの育成にあたり、昭和二十一年宝塚プールにおける全国高校水泳で第二位の好成績を獲得したのを皮切りに、次々と栄光の歴史を書き加えている。

岡田の水泳コーチ・監督としての横顔をのぞいてみる。新しい泳法を個々の選手に適するよう取り入れた科学的練習法。ストップウォッチを持ち、プールサイドを走りまわって叱咤激励した猛訓練。

選手の規律や礼儀の正しさに定評のあった水泳を通した人づくりの態度。自宅に寄宿させた選手の面倒や合宿

の世話から卒業後の就職あっせんまで気を配った温情。

岡田は県内はもちろん他県や遠く沖縄からも選手を集めたスカウトの手腕。後援会との巧みな折衝（せっしょう）などが水泳関係者の語る彼への人物評である。要するに岡田はコーチ・監督としてのあらゆる要素が、円熟完成の域に達していた水泳の偉大な指導者であった。[71]

〈硬式野球〉　昭和二十八年、佐伯鶴城高校野球部は、全国大会東九州予選で優勝戦に進出し、甲南高校に二―〇で惜敗している。昭和三十年代では、同三十七年、春の県大会で優勝し、熊本大会に出場している。

また、同三十九年には春の県大会で優勝、次いで中九州予選に出場し、優勝戦では八代東高校に四―三で惜敗している。

〈軟式庭球〉　昭和三十四年の高校県体で豊南高校女子チームは初めて団体優勝している。

また、昭和三十二年、第十回県体中学の部で佐伯市チームは他都市を破り、宿望の優勝杯を初めて獲得した。

〈硬式テニス〉　佐伯市における硬式テニスの歴史は戦後に始まっている。四面の興人コートで、会社の有志たちの手によって練習が始められたのは昭和三十年代に入ってからである。

昭和三十二年、第十二回国体には興人クラブの飛永靖則選手が出場している。

〈バスケットボール〉　佐伯でバスケットボールが始められたのは、昭和の初期で、佐伯中学校の野田輝男教諭が、運動場の隅にコートをつくり生徒たちを指導してからだといわれている。戦後は、昭和二十三年に鶴城高のバスケット部が再発足している。

いま、昭和三十年代の活動をみると、昭和三十一年、鶴城高女子チームは西日本大会県予選で優勝。同三十二年、男子チームは九州大会県予選で優勝している。

〈バレーボール〉　佐伯のバレーボールの歴史は大正時代の末期にさかのぼる。当時はもっぱら女学生のスポーツであったようで、佐伯高女第二代の校長河野多留氏の思い出記によれば「バレーを校技とし、コートをいくつもつくって全校生徒にやらせ、その中から選手を選抜して猛練習をかさねた。スマッシング戦法（球を上から叩きつけるように強く打ちかえすこと）を取り入れて技を練り、県大会では強敵を制し優勝旗をもち帰った。さら

に余勢をかって東九州大会にも進出し栄冠を勝ち取ることができた」とあるが、これは昭和二年(一九二七)ごろのことであった。

佐伯市バレーボールの戦後の活躍は、一般男子チームが県体で毎年かなりの成績をあげていたが、昭和三十年・三十三年の二回他郡市を制し優勝した。

また、昭和三十二年、鶴谷中学が県体育大会で優勝。さらに同三十七年・三十八年にも県体で活躍、優勝している。

〈サッカー〉　サッカーは、生徒・一般ともに大分市や中津市に比べて、著しく劣っている種目である。したがって県大会においても、中学生チーム・高校チームそれぞれ健闘するが、優勝の経歴は全くない。その中で興人チームの活躍には著しいものがある。

すなわち、興人チームの昭和三十年代の成績は次のとおりである。

昭和三十三年・国体県予選で優勝。一―〇対上野丘〇B

昭和三十四年・県体で優勝。三―一対大分市

昭和三十五年・県実業団選手権で優勝。二―一対吉富製薬

・国体県予選で優勝。四―二対上野丘〇B

〈ソフトボール〉　佐伯市のソフトボール一般チームが、県大会に出場したのは、記録によると昭和三十五年からであるが、その後急速にレベルアップし、西田病院・日本セメント・興人など有力なチームが現われている。

佐伯市男子チームは昭和三十八年度に県体で優勝している。

また、昭和三十九年には堅田中学が県ソフトボール大会で優勝している。

〈体　操〉　体操競技は、佐伯市においては歴史の浅い種目である。昭和三十四年東京で開かれた国体に、佐伯鶴城高の豊村伊一郎が県代表として器械の部に出場している。これが佐伯鶴城高体操部の頭角をあらわした最初のようである。

昭和三十五年に佐伯鶴城は、高校県体徒手体操の部で、男子チームは優勝している。さらに、彦陽中学チームが、昭和三十五年中学校県体徒手の部で優勝している。

一般男子チームは県体において昭和三十九年、関輝幸選手が個人総合優勝している。

〈相　撲〉　この種目では、戦前から佐伯市は南郡とともに、県下で常に圧倒的な優位を誇っていた。戦後になってからも一般・高校・中学ともに、かなりすぐれた成績を見せているようである。

昭和三十三年、佐伯鶴城チームは県体で団体優勝。赤崎が個人優勝。また、九州大会では団体三位。さらに全国大会では川野が個人第二位の成績をおさめた。

昭和三十六年県体では、一般青壮年チームが優勝、栄誉を担っているほか、毎年の出場にはいつも上位の成績を占めている。同三十六年に佐伯鶴城高は県大会で団体優勝。また、九州大会に出場、佐保が個人三位の成績。

昭和三十七年、佐伯高校チームは九州大会(諫早市)に出場、堺田英己が個人優勝している。

また、中学校チームは昭和三十三年・三十六年の県体で団体優勝。さらに三十二年の県体では、彦陽中学の畠野が個人優勝している。

〈弓　道〉　佐伯市のスポーツ団体においては、弓道部は水泳部とともに輝かしい戦歴をもっている。終戦後、昭和二十四年に故小野芳夫らの努力によって三の丸に弓道場が建設され、同好会員により熱心な練習が始められて以来、各大会で赫々たる成績を残している。三の丸道場はその後、文化会館建設のため取り払われ、現在市内には鶴城高校、興人、日本セメントの三道場がある。

一般青壮年の部では、佐伯市チームは県体男子の部で昭和二十七年から何度も優勝している。また、女子チームも好成績を残している。

市役所チームは県職域弓道大会で昭和三十二年から二回優勝しており、興人チームは三十八年に優勝している。また、昭和三十六年の全日本弓道選手権には荒武徹が出場している。

佐伯鶴城チームの昭和三十年代の活動状況をみると、昭和三十一年に男子チームは全国大会に出場して第三位の成績をおさめ、三十四年には女子チームは全国大会で団体優勝し、また深沢奈那子が個人優勝を飾っている。三十九年にも女子チームは九州大会で団体優勝している。

〈柔　道〉　佐伯豊南高校生の児玉光弘は、昭和三十二年、三十三年の国体に大分県代表として出場、活躍して

いる。また、佐伯(一般)チームは県体の第一回から欠かさず出場、相当の成績を残している。

〈剣　道〉　かつて非常に華やかだった剣道は、戦後、その軍国主義との結びつきを理由に圧迫を受け、「竹刀(しない)競技」の名称で呼ばれた時期もあったが、ところが次第に復興し、中学・高校ではクラブ活動として取り上げられるようになった。

佐伯市チームは県体には初回以来毎年出場して、上位の成績をおさめている。

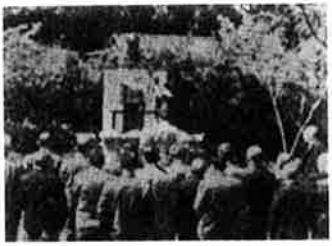
〈射　撃〉　射撃は、戦後になってスポーツの一種目として県体育大会に取り入れられた。佐伯では射撃場は初め長島区にあり、後灘区に移されたが、狩猟愛好者の中から選ばれた市代表選手はそこで練習をして県大会に出場した。そして、昭和三十七年・三十九年と二回クレー射撃の部門で優勝している。

以上、各競技について昭和三十年代を中心に概観したが、『佐伯市史』から主として引用したが、学校関係のスポーツ資料は学校の記念誌などを参考にした。[76]

郷土のスポーツの先覚者

野村先生の胸像再建

佐伯市スポーツ界の育ての親ともいえる野村越三先生の胸像除幕式は十六日午前十時半から、三の丸正門横広場に建てられた胸像の前で関係者多数列席して盛大に行なわれた。



野村越三の胸像除幕式

野村越三先生は明治十七年(一八八四)六月出生。鶴谷学館を経て、明治三十二年臼杵中学に入り特待生となった。

翌三十三年医学修行のため上京してドイツ協会学校に入学、同三十九年病気のため退職して帰郷、間もなく佐伯小学校で教鞭をとった。先生はスポーツ万能選手で、フィールドにトラックに十種競技の指導や、草分け当時の野球をコーチして大分県下でも有名であった。

胸像は大正十五年(一九二六)に市内養賢寺前広場に建

設され、戦時中金属回収の憂目をみるはずのところ美術品の名目で東京在住の実弟阿南衛氏宅に保管されていたもの（資料は香川氏提供）。（『佐伯市報』・昭和三十五年五月十五日号）

【注】

(73)矢野彌生「佐伯人物伝・横川末吉」（『市報さいき』平成十三年六月一日号）

(74)矢野彌生「佐伯人物伝・岡田正一」（『市報さいき』平成十二年三月一日号）

(75)『佐伯市史』をはじめ、次の資料から引用した。『佐伯市南海部郡学校教育史要覧』（郡市現退職校長会編　昭和六十一年）・『鶴城開校70周年記念誌』・『佐伯鶴城部活動史』・『佐伯豊南高校創立50周年記念誌』・『佐伯城南中学校開校三十周年記念誌』・『鶴谷回顧』

地名のルーツ

◆番　匠

県南に番匠川という大きな川があるが、その川の流れている弥生町の小田と門田に番匠、また門田に番匠畑という地名がある。この三ヵ所のほか、日出町大神に平番匠、大分市丹川に番匠給がある。

さらに、竹田市戸上や豊後高田市のハン上田なども番匠に起因するものと思われる。ただ、大分市今津留などにある番所は、発音は似ているが文字通りの番所かもしれない。

番匠というのは建築業者、つまり大工さんのことである。律令時代に飛騨の国などから匠（たくみ）を都に交代で上がらせたから番匠と呼ぶようになったらしい。江戸時代になると、大工も普通の家大工のほかに、社寺の建築に当たる宮大工、船などの建築に当たる船大工などと分化してくる。

番匠は古くから貴重な技術を持つものとして荘園などに抱えられており、領主から田畑などを賜っていた。番匠給とか番上田などの地名は、番匠に領主が与えていた給田と思われる。

（「大分の地名」・大分合同新聞）